

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 4日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20320030

研究課題名（和文）

東京音楽学校の諸活動を通して見る日本近代音楽文化の成立——東アジアの視点を交えて

研究課題名（英文）The emergence of modern musical culture in Japan: the early days of the Tokyo Music School and its programs, activities, and relations with East Asian states

研究代表者

大角 欣矢 (OSUMI KINYA)

東京芸術大学・音楽学部・教授

研究者番号：90233113

研究成果の概要（和文）：

本研究は、東京音楽学校における専門教育という事例を通じて、日本近代音楽文化の成立と変遷の具体相の解明に寄与しようとする試みである。この目的のため、同校における(1) 明治期における楽譜の所蔵状況、(2) 外国の声楽曲に新たに創作された日本語の歌詞を当てはめて歌う実践（「作歌」）に係る諸資料、(3) 教務関係公文書、その他を調査し、データベース化を進めた。これら諸資料の分析から、(1) 楽譜購入とその使用状況、及び演奏会曲目との間の密接な関連、(2) 「作歌」に見られる、東西二洋の文化接触・文化変容としての意義、(3) 主として中国からの留学生が置かれていた困難な就学の実情、などが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

The project carries out detailed investigation into the processes during which Japan's modern music culture established itself and underwent transformations, through examination of the nature and structure of the music education at the Tokyo Music School (now the Tokyo University of the Arts, School of Music). The research was conducted on: 1) the data that indicates the content of the music score collections at the School; 2) material pertaining to vocal compositions in which Japanese texts were set newly to the existing compositions ("Sakka"); and 3) official documents on curricula and other educational aspects, which have then been compiled into a database.

From these investigations, the following has been revealed: 1) there were correlations between the music scores purchased by the School and educational/performance programs; 2) "Sakka" played an important role in bridging and negotiating between western and eastern music cultures; and 3) there were several foreign students, including some from China, who were under severe financial condition.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	5,100,000	1,530,000	6,630,000
2009年度	2,600,000	780,000	3,380,000
2010年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2011年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
年度			
総計	13,600,000	4,080,000	17,680,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：芸術諸学、音楽、音楽専門教育、音楽文化、日本近代史、東京音楽学校、東アジア、留学生

## 1. 研究開始当初の背景

本研究に先行する研究プロジェクト、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(B)「近代日本における音楽専門教育の成立と展開に関する研究」(平成17~19年度、研究課題番号:17320026、研究代表者:大角欣矢)は、『東京芸術大学百年史』(1987-2003年)編纂に際して行われた調査研究を土台として、東京音楽学校時代の楽譜の受入状況と明治28年までの同校における演奏実践との関連や、外国の声楽曲に対し新たに創作された日本語の歌詞を割り振って歌う「作歌」の実践の実情に関する研究、教務関係公文書の目録化その他を進めた。これらの調査により、東京芸術大学が承継保管する歴史的資料のうち、研究教育に直接関連するものの体系的な把握が大幅に進んだ。

しかしながら、この研究プロジェクトを進める過程で、次項「研究の目的」において詳述するような新たな課題が浮かび上がった。特に、東京音楽学校の活動を近代史の大きな歴史的文脈に位置づけようとした場合、諸外国、特に東アジア近隣諸国との動的な関係を見逃せないことが痛感された。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、東京音楽学校における音楽の専門教育を事例として、東アジアというコンテクストを視野に入れつつ、日本近代音楽文化の成立と変遷の様相を解明することである。

この目的の遂行のため、前項で言及した先行プロジェクト「近代日本における音楽専門教育の成立と展開に関する研究」を進める中で浮かび上がった次のような課題の解決を図って行く。

### (1) 楽譜の受入状況と教育研究との関連

#### ① 楽譜受入状況の調査

明治期に受け入れられた楽譜の大半については、東京芸術大学附属図書館OPACへの遡及入力が未完了のため、前記プロジェクトで作成された楽譜データベースは、受入原簿と現行の図書館目録カードを照合し、その記載内容を入力したに過ぎない。このため、不足している書誌情報を補う必要がある。

#### ② 楽譜受入台帳の調査

明治18年記入開始の『楽譜仮名目録』と、その内容を引き継ぐ形で明治28年に記入が開始された『楽譜原簿』との詳しい照合も課題として残されている。

#### ③ 楽譜受入状況と演奏曲目の関連

東京音楽学校が受け入れた楽譜と、同校の演奏会における演奏曲目との関連については、前記先行プロジェクトにおいて明治28

年までの考察を行ったが、それ以降については課題として残されている。

### (2) 「作歌」の調査

前記プロジェクトにおいて着手した「作歌」データベースの入力をさらに進める必要があるほか、関連情報の集約のためには、作歌が書き込まれた楽譜以外の関係資料についても目録等の作成が望まれる。

### (3) 公文書調査

前記プロジェクト終盤になって、それまで確認されていなかった教務文書108点の存在が新たに確認され、その目録化の必要性も認識された。

### (4) 諸外国との関係

東京音楽学校で学んだ留学生の動向や、同校の前身音楽取調掛が行ったアジアの諸楽器収集等を通じて、同校の活動をアジア近代史のコンテクストに位置づける必要がある。

## 3. 研究の方法

### (1) 楽譜の受入状況と教育研究との関連

#### ① 楽譜受入状況の調査

東京音楽学校における最初期の楽譜受入状況については、上述した先行プロジェクトにおいて、2665点分のデータ入力が完了しているが、前述のように書誌情報に不備がある。このため、今回これらのデータと楽譜現物一点一点との照合を行い、出版地、出版社、出版年、出版番号、頁数、サイズ、押印されている所蔵印といった詳細情報の採取を進める。また人名や楽曲について詳細不明なものの調査や推定、人名表記の統一等も進める。

#### ② 楽譜受入台帳の調査

『楽譜仮名目録』(明治18年記入開始)と『楽譜原簿』(明治28年記入開始)との詳しい照合を行い、音楽取調掛から東京音楽学校への楽譜資産継承の実態を明らかにする。

#### ③ 楽譜受入状況と演奏曲目の関連

明治29年以降の学校主催の演奏会(定期演奏会、及び卒業式)における演奏曲目の特色・傾向・推移を明らかにし、楽譜受入との関係を考察する。

### (2) 「作歌」の調査

前記先行プロジェクトの成果を引き継ぎ、明治期に行われた「作歌」に関する諸資料(楽譜だけでなく、雑誌等も含む)を調査して、下記の一覧表を作成する。

- ① 東京音楽学校所蔵声楽楽譜に見られる作歌の書き込み
- ② 同演奏会における作歌関連の演奏曲目
- ③ 同演奏会に対する作歌関連の批評
- ④ 『音楽雑誌』所載の作歌
- ⑤ 『唱歌詞集』等作歌を取めた文書(東京

藝術大学附属図書館所蔵)の内容

さらに、作歌の書き込まれた楽譜のうち、代表的なものにつき考察を行い、また二、三の例については翻刻し、広く一般の研究に供する。

### (3) 公文書調査

東京音楽学校の教務関係公文書のうち、今回新たに存在が確認された大正8年から昭和22年にかけての合格者の入学願書全108冊につき、目録データベース化に着手する。

### (4) 諸外国との関係

#### ① 留学生関係

教務関係公文書のうち、文書綴『外国人生徒関係書類自明治三十七年至大正〔十三〕年』には、同期間に東京音楽学校で学んだ主として近隣諸国出身の留学生の動向に関わる情報が含まれている。この綴全1冊を撮影・デジタルデータ化し、その内容につき検討する。

#### ② 楽器関係

東京音楽学校が所蔵していた明楽器を始め、明治期に収集・研究・展示等がされた関連の諸楽器につき、先行研究を踏まえて新たにまとめ直してその意義を考察し、またカラー写真が無いものについては新たに撮影を行う。

## 4. 研究成果

詳しい研究成果については、大角欣矢編『東京音楽学校の諸活動を通して見る日本近代音楽文化の成立——東アジアの視点を交えて——平成20~23年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書』を参照されたい。以下には概要のみを記す。

### (1) 楽譜の受入状況と教育研究との関連

#### ① 楽譜受入状況の調査

先述のような方法でデータを整備し、作業が完了した受入番号1~1099番(『楽譜原簿』における受入年月日明治28~30年度)の1330件についてウェブ上で一般公開した。なお、データベースの概要と検索ガイド等も整備公開した。

#### ② 楽譜受入台帳の調査

上記2点の受入台帳につき、その内容を詳細に照合して対照表を作成、なされた修正・変更・加除等をほぼ明らかにした。これにより、音楽取調掛から東京音楽学校への楽譜資産の承継の実態が明らかとなった。

#### ③ 楽譜受入状況と演奏曲目の関連

明治32年、高等師範学校から再独立した東京音楽学校がアウグスト・ユンケルを雇教師に迎えてから、管弦楽の学習及びその成果発表が盛んとなるが、演奏曲目と楽譜受入との間には密接な関連を見出すことができ、また現存する当時の所蔵楽譜には、当時から使用されていたことを明白に窺わせる痕跡が多数あることも明らかとなった。また、演奏曲目に関して言えば、明治30年代以降、管

弦楽曲の大規模化、ドイツ・オーストリア系作曲家への偏りが顕著となることもわかった。

### (2) 「作歌」の調査

先述の一覧の作成により、明治期の東京音楽学校に関係した作歌の実態を概括的に見渡し、研究のため必要な原資料に容易にたどり着くことが可能となった。また、作歌の実際を理解するために、いくつか例を取り上げて内容的な分析・考察を行った。その結果、明治期の外国声楽曲に対する作歌は、かつて言われていたように原曲と全く無関係に行われた訳ではなく、原曲の意味を深く理解した上で、それを明治日本という文脈に置き直し、「日本の歌」として詠み直す、東西二洋の文化接触・文化変容の興味深い一例として捉えうるようになった。

なお、作歌を代表する例として、ケルビーニの《レクイエム》ハ短調(鳥居忱作歌「橘の薫」と、ヘンデルの《メサイア》より「ハレルヤ・コーラス」(鳥居忱作歌「神武東征」及び「藤寄祝」)を翻刻し、研究報告書に収録した。

### (3) 公文書調査

東京音楽学校の教務関係公文書のうち、大正8年から昭和22年にかけての合格者の入学願書全108冊について、新しいもの35冊(第73~108番、昭和15~22年)に記載されている人物情報3168件のデータベース化を完了した。

### (4) 諸外国との関係

#### ① 留学生関係

先述の文書の内容を分析、考察を行った。その大半は中国からの留学生の身分や学費の出所をめぐる学外機関とのやりとりであった。これにより、当時の政治・国際情勢との関連の中で留学生が置かれていた困難な状況の一端が明らかになった。

#### ② 楽器関係

東京音楽学校が所蔵していた明楽器を始め、当時、収集・研究・展示等がされたアジアの関連諸楽器につき、先行研究を踏まえて新たにまとめ直してその意義を考察した。また上記明楽器のように、これまでカラー写真が無かったものについて、初めてカラー撮影を行い、研究報告書に掲載した。

以上のような研究によって、近代日本における西洋音楽の受容が官主導の下でどのように行われたか、また東アジアの近代音楽文化形成に日本がどのような役割を果たしたのかという問いに対し、東京音楽学校の諸活動という視点を通じてアプローチするための一つの枠組を提示することができたといえよう。すなわち、原資料の調査・目録化という歴史研究の最も基礎的な作業に着手し、端緒的・例示的ではあっても、そこで得られた情報の分析と評価へ向けた道筋を示した

という点で、本主題に関わる今後の研究のための研究基盤の整備を進めることができたと考えられるのである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 塚原康子、近代日本における日本・東洋楽器の展示をめぐって、第九屆中日音楽比較国際学術研究会論文集、査読無、2011年、282-286
- ② 尾高暁子、東京音楽学校管理文書にみる中国人留学生、第九屆中日音楽比較国際学術研究会論文集、査読無、2011、195-205(日本語)、206-217(中国語)
- ③ 橋本久美子、乗杉嘉壽校長時代の東京音楽学校 昭和3年～20年——その建学の精神の具現化と社会教育論の実践——(3)、東京芸術大学音楽学部紀要第36巻、査読有、2011、179-194  
<http://www.lib.geidai.ac.jp/kiyo/mbull30.htm>

[学会発表] (計8件)

- ① 尾高暁子、東京音楽学校管理文書にみる中国人留学生、第九回中日音楽比較国際学術研究会、2011年11月13日、中国山東師範大学音楽学院
- ② 塚原康子、近代日本音楽史について、中国・中央音楽学院「世界音楽週」シンポジウム(招待講演)、2011年11月3日、中央音楽学院(北京)
- ③ 橋本久美子、東京芸術大学音楽学部の132年、中国・中央音楽学院「世界音楽週」シンポジウム(招待講演)、2011年11月3日、中央音楽学院(北京)
- ④ 大角欣矢、東京音楽学校における音楽専門教育——演奏曲目と所蔵楽譜から見えるもの、日本音楽学会東日本支部第4回定例研究会、2011年9月10日、福島大学
- ⑤ 塚原康子、明治の国家儀礼と音楽——近世との比較から——、日本音楽学会東日本支部第4回定例研究会、2011年9月10日、福島大学
- ⑥ 塚原康子、近代歌謡の創出過程とその周辺、茨城県高等学校教育研究会音楽部会(招待講演)、2011年6月23日、茨城県立高萩高校
- ⑦ 植村幸生、東京芸大図書館蔵「中樞府重修宴契会図」にみる十六世紀朝鮮の宴礼歌舞、東洋音楽学会、2010年11月13日、東京学芸大学
- ⑧ 橋本久美子、東京音楽学校と邦楽科設置、東洋音楽学会、2008年11月16日、武蔵野音楽大学

[図書] (計2件)

- ① 津上智実、橋本久美子、大角欣矢、ピアニスト小倉末子と東京音楽学校、東京芸術大学出版会、2011、127
- ② 塚原康子、明治10年(1877) S・M・タゴールが日本に寄贈したインド楽器と楽書、藤井知昭・岩井正浩編『音の万華鏡——音楽学論集』岩田書院、2010、305-326

[その他]

ホームページ等

<http://www.geidai.ac.jp/labs/musicology/>

(トップページ>研究関連情報>東京音楽学校所蔵楽譜データベース)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

大角 欣矢 (OSUMI KINYA)  
東京芸術大学・音楽学部・教授  
研究者番号：90233113

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

植村 幸夫 (UEMURA YUKIO)  
東京芸術大学・音楽学部・准教授  
研究者番号：80262252  
尾高 暁子 (ODAKA AKIKO)  
東京芸術大学・音楽学部・講師  
研究者番号：00397019  
(平成21年度より)  
片山 千佳子 (KATAYAMA CHIKAKO)  
東京芸術大学・音楽学部・教授  
研究者番号：10152688  
関根 和江 (SEKINE KAZUE)  
東京芸術大学・音楽学部・助教  
研究者番号：10242257  
塚原 康子 (TSUKAHARA YASUKO)  
東京芸術大学・音楽学部・教授  
研究者番号：60202181  
土田 英三郎 (TSUCHIDA EIZABURO)  
東京芸術大学・音楽学部・教授  
研究者番号：10143645  
橋本 久美子 (HASHIMOTO KUMIKO)  
東京芸術大学・総合芸術アーカイブセンター・特任助教  
研究者番号：70401495  
福中 冬子 (FUKUNAKA FUYUKO)  
東京芸術大学・音楽学部・准教授  
研究者番号：80591130

(平成 22 年度より)  
船山 隆 (FUNAYAMA TAKASHI)  
東京芸術大学・名誉教授  
研究者番号：50015252  
(平成 20 年度まで)